

第3章-3. 江戸時代の儒学

儒家思想（儒教・儒学）は仏教と同時期に伝来したが、初めは仏教中心。

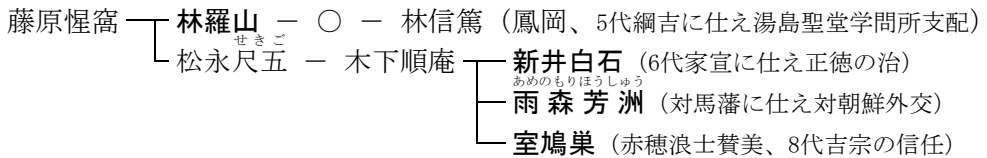
鎌倉・室町時代に、臨済宗系の禅宗僧によって、茶・水墨画といった中国の科挙官僚・知識人の文化の中心をなすものとして儒学の主流派である朱子学が伝来するもなお禅僧による学問にとどまる。

江戸時代の幕藩体制を支える政治思想として利用されるようになった。

1. 朱子学

上記の理由から官学化された朱子学は、政治思想的な面を重視（＝大義名分論）

<京学派>



<南学派> 南村梅軒 … 谷時中 — 山崎闇斎

<水戸学> 朱舜水（明の人） — 藤田幽谷 — 藤田東湖
徳川光圀 — 会沢安（正志斎）

「大日本史」の編纂 → 幕末の尊皇思想の1つの源流

- ◎ **藤原惺窩**（1561-1619）……京五山・相国寺の僧。のち還俗。
家康に講義。仕官はせず林羅山を家康に推薦
- ◎ **林羅山**（1583-1657、建仁寺で仏教を学ぶが出家せず。朱子学に熱中するうち藤原惺窩に会う。）
 - ・ **上下定分の理**……自然に天と地の上下があるごとく人間にも身分差がある！
この秩序に従うのが“礼”である。
 - ・ **存心持敬**……身分関係の中で私利私欲を抑えた状態を保つ（＝居敬）
 - ・ 五倫五常の重視
- ◎ **新井白石**（1657-1725）
著書「**西洋紀聞**」……宣教師シドッチの尋問記録
西洋は形而下の学問（科学技術）は優れているが、
形而上学（キリスト教、神がこの世を創造した etc.）は取るに足らず
- ◎ **山崎闇斎**（1618-82、南学派）
朱子学と神道の融合 → **垂加神道**（尊皇論へ）
→ 門弟が朱子学と神道に分裂

2. 陽明学

- ◎ 中江藤樹 (1608-48) …… 初め朱子学を学ぶが失望し陽明学へ
著書『翁問答』
- ・ 孝 = 愛敬 (あいけい)
親子間のみ限定せず、全ての人間関係において下の者が上の者を敬う
↓ (身分秩序を肯定する点で朱子学と同じ土台)
時 (時期)・処 (場所)・位 (身分) によって表現を変える
→その見極めをするのが**良知**
- ・ 熊沢蕃山 …… 岡山藩に仕え、飢饉対策などを実践
 - ・ 大塩平八郎 …… 大坂町奉行の与力、天保の飢饉の際に挙兵
2人とも「**知行合一**」=良知の実践をしている

3. 古学

朱子学・陽明学とも最近の思想 → 孔孟の原典に回帰 (これは日本にしかない。)

- (1). 古学の祖…山鹿素行 (1622-85) 著書『聖教要録』
孔子・孟子の教を注釈なしで学ぶべき → 為政者のあり方を学ぶ
- ・ 士道…武士は日用之業において農・工・商の手本 (三民の師表) となるべし
太平の世の官僚となった武士のための道徳
⇔山本常朝『葉隠』の観念的な武士道とは違う
(武士道とは死ぬこととみつけたり、名を重んじ恥を知る etc.)
- (2). 古義学…伊藤仁斎 (1627-1705) 著書『童子問』
孔孟本来の思想を『論語』『孟子』の熟読で明らかにする
- ・ 誠 = 忠信 (= 真実無偽 の心 ← 日本古来の清明心) の実践によって、
仁愛 (人間相互の愛) の実現をはかる
- (3). 古文辞学…荻生徂徠 (1666-1728)
中国の古語 (古文辞) で書かれた六経 (五経+『楽経』) を研究
- ・ 先王の道 = 安天下の道
孔子が手本とした堯・舜・禹・周公旦などは
経世済民 (世を治め民を救う) ために「礼楽刑政」を整備した
(儀礼・音楽・刑罰・政治=具体的な制度)

→現実的施策が重要なはずなのに、朱子学は自然の理で済ませてしまう、と批判

第3章-4. 国学

中国の儒学をそのまま日本に適用するのはおかしい

“神道軽視・感情軽視・外来思想（儒学・仏教）重視”への反発



「万葉集」や「古事記」「日本書紀」の研究から日本古来の思想を明らかにする

◎ 契沖（1640-1701）……国学の祖 万葉集研究 『万葉代匠記』

◎ かだのあずまる 荷田春満（1669-1736）……記紀の研究から、「古道」の存在とそれへの回帰を説く

◎ 賀茂真淵（1697-1769） 著書『国意考』
「万葉集」に注目し、和歌にこそ古代日本の心情が発露していると説く。



- ・ 高く直き心……おおらかで自然な心
- ・ ますらをぶり……男性的でおおらか



・ からくにぶり……中国の儒学のような人為的で理屈っぽいさま

◎ 本居宣長（1730-1801） 著書『古事記伝』など

「古事記」の神話に注目

- ・ 惟神（かんながら）の道……神々の素直でおおらかなあり方
これを天皇がまねて人間社会で実行したのが「古道」
- ・ 漢意（からごころ）を捨て^{まごころ}真心（やまと心）に立ち返る

「古今和歌集」「源氏物語」も研究

- | | | | |
|---|-------------------------------|---|----------|
| } | ・ <u>たをやめぶり</u> ……女性的で優美な調べ | } | これらを高く評価 |
| | ・ <u>もののあはれ</u> ……しみじみとした心の感動 | | |

※しかし「古今集」はすでに“からごころ”に汚染された時代のもののはず＝宣長の矛盾点

この点については後世、門人たちの間でも論争となった

小林秀雄「本居宣長」ではこの点を指摘していない、と丸山真男が（小林を）批判している。

◎ 平田篤胤（1776-1843）

天皇崇拝・国粹主義……復古神道

外来思想を排除して神道を復活させよう、と説く



幕末の尊皇攘夷思想の源流の一つになる

江戸時代の庶民思想

◎ 石田梅岩 (1685-1744、京) ……石門心学＝商人の道德、主著『都鄙問答』

儉約・正直 (せいちよく)

知足安分 ……足るを知り、その分に安んずる

商いによる利の追求は「天下御免の禄」(武士の禄と同じ)として肯定
(武士と商人は、身分ではなく職能の差。人としては等しく尊い。)

☆ 懐徳堂 ……大阪町人の塾

◎ 富永仲基 (1715-46) ……『出定後語』

大乘仏教非仏論…「加上」の論理から

新しい経典は古い経典の教説に異なった教説を加上しながら発展

ヴェーダ→六師外道→釈迦・小乗仏教→大乘仏教と加上されてきた

◎ 山片蟠桃 (1748-1821) ……『夢の代』

無鬼論(無神論)を説き、儒・仏・神道を批判

◎ 安藤昌益 (1703-62、青森・八戸の町医者)

主著『自然真営道』…門外不出とされる

1899年、狩野亨吉 (一高校長、のち京大教授)が入手し公開

E.H. ノーマン (カナダ外交官・歴史家) 『忘れられた思想家』で紹介

(「人間不平等起源論」に匹敵する内容である、と評価)

・ 万人直耕

全ての人が直接耕し食べ、尊卑や貧富の差がない「自然世」が理想

⇔ 現実の身分社会は「法世」

武士・町人らのことを「不耕食食」の徒」と批判

・ 互性…男女、天地、昼夜、生死などは、対立するのではなく序列もない。

一体として生き生きと運動する(自然活真)ものである。

◎ 二宮尊徳 (1787-1856、小田原) ……農民の勤労倫理

・ 世界の法則…天道 = 穀物を実らせるのは自然法則

人道 = 収穫して豊かな生活を実現するかどうかは人間の能力

・ 至誠、勤労、儉約

勤労・儉約で生活に余裕を残すこと = 分度

その余裕によって社会に貢献すること = 推譲

・ 報徳 思想

天地・君主・父母・祖先の徳(働き)に対し、自己の徳をもって報いる

マキャヴェリ

fortuna と virtù